

(新潟県南魚沼郡医師会) 菅 治男

〔目的〕ここ数年急増傾向にあるスノーボード外傷について、スキー外傷との比較を中心にその頻度、特徴、予防法につき検討した。

〔対象および方法〕1994年11月から1995年3月31日のあいだに南魚沼郡内の医療機関、パトロールを受診したスノーボード外傷患者を対象とし、スキー・スノーボード関連外傷調査カードをもとに年齢、性別、外傷部位、外傷の種類、受傷原因などを検討した。

〔結果〕スノーボードによる外傷は613例で、スキーによる外傷は3,917例であった。受傷者の平均年齢はスノーボードでは22.1±9.5歳(平均±2SD)、スキーでは25.8±22.6歳であった。受傷率はスノーボードでは0.58%であり、スキーの0.15%の約4倍であった。受傷者の技術はスノーボードでは初心者・初級者の割合が高く、両者が64%を占めた。受傷原因はスノーボード、スキーともに自己転倒が最も多く、同様の傾向であった。受傷部位はスノーボードでは上肢が多く、逆にスキーでは下肢が多かった。怪我の種類はスノーボードでは骨折が28%を占め、重篤な外傷がスキーに比べて多かった。特に手関節、肩関節部に骨折が集中した。膝関節捻挫や母指の外傷は少なかった。また、左足が先行することが多いため、上下肢の骨折、捻挫、脱臼、いずれにおいても左側が有意に多かった。

〔考察〕スノーボードは手をついて転倒することが多く、特に上肢の骨折、脱臼の予防策が急務であり、そのためのプロテクターを考案中である。また、専用バーンの整備、スクールの充実、ライセンス制度の導入などが今後の課題として考えられた。

5. 1994～1995シーズンのスキー診療所の外傷傾向

(¹)青山病院整形外科, (²)膠原病リウマチ痛風センター, (³)整形外科, (⁴)第二病院整形外科)

徳永建路¹⁾・川井三香²⁾・入江一憲¹⁾・井上和彦²⁾・池田和男³⁾・千葉純司⁴⁾

我々はスキー診療所の運営にあたっているが、今シーズン、即ち1994年3月～1995年4月にスキー診療所を訪れた外傷患者の内訳を報告すると共に、1991年開設時の外傷傾向と比較・検討した。

シーズン中訪れた患者は全部で940名で、3つのスキー場から送られてくる受傷者の総数は1,373,500名であった。外傷発生率は0.068%と0.157%の間と考えられる。外傷部位では、下腿が膝関節を含め約半数を占めていた。疾患別では捻挫が最も多く、切創、打撲、骨折、脱臼と続いた。捻挫部位では、膝関節が70%

で最高であった。靭帯、半月板損傷では、1991年度が122名、今シーズンが204名で割合別で見ると、今シーズンでは前十字靭帯損傷が若干増加している。これは前十字靭帯損傷の発生頻度が増えたというより、診療所設備を含めた診察側の診断能力の上昇、搬送病院のフォローの充実によるものではないかと考えている。脱臼部位では、肩関節が79%と圧倒的に多かった。肩関節脱臼のなかで、初回脱臼が多かった。下半身骨折では下腿骨骨折が最も多く次いで大腿骨折が多かった。上肢・胸部での骨折では体幹部に近い骨折が多かった。切創部位では顔面、頭部が60%を占めた。

今シーズンは、開設当時の外傷傾向と大きな変化はみられなかった。開設時の来院患者数は580名であり、今シーズンの患者数は1.5倍の980名であった。開設時の上越国際スキー場の入場総数が67万名と今シーズンより7万名近く多かったことを考えると、スキー外傷率が上昇したのではなく、当診療所の利用者が増加したと考えられる。今後スキー診療所に対するニーズはますます増えると考えられ、より質の高い医療を提供しなくてはなるまい。

6. 膝蓋靭帯を使用した膝前十字靭帯再建術における膝蓋靭帯形成の試み

(青山病院)

入江一憲・川井三香、井上和彦

膝前十字靭帯再建術の再建材料としての膝蓋靭帯中央1/3は自家組織のなかでは広く用いられている材料であるが、その欠点として術後3～9カ月にかけてのリハビリテーション期間中の大腿四頭筋萎縮が強いことがあげられる。これまでに膝蓋靭帯の採取部は欠損部のままであったが、欠損部を埋める操作を追加すれば少しでも術後の大腿四頭筋萎縮が防げるのではないかと speculation のもとに、膝蓋靭帯採取欠損部を市販のヒト乾燥大腿筋腱で補填する手術を行った。また、術後10カ月以上を経過した例は1例のみであるが、膝上10cmの大腿周径の患健差の最大は2cmであり、欠損したままの症例のような3～4cmの患健差を示すものではないという結果を得た。

我々のパッチを充填する方法でも mechanoreceptor を介した神経経路での筋萎縮は押さえようがないが、残存靭帯が伸びることを防ぎ、それによって筋緊張が維持され、欠損部の早期修復とあいまって筋萎縮が少しでも押さえられるメカニズムが働くことは期待できるのではないかと考えている。

現在はより高い欠損部の充填率をめざして外側皮切